

終戦前夜

昭和二十年八月十四日、私は部隊の連絡で、栃木県壬生飛行場近郊の部隊本部から、一人で、群馬県高崎市に、来ていた。次の日は八月十五日、終戦の日である。

高崎の分隊との連絡も終わり、夕方高崎駅に辿り着いた。あの当時の列車は、時刻通りには動かない、その上すし詰めだった。とうとう真夜中になってしまった。

高崎駅は、市街地の端にある。駅で乗車を待っている時、市街地は大空襲に襲われた。焼夷弾の雨である、天気の良い日だったから、焼夷弾が無数の光の尾を引き、暗い空から降ってくる。パチパチと音をたて、みるみるうちに高崎市街は火の海に包まれた。

高崎駅構内で震いながら傍観していた自分を思い出す。終戦が一日早かったら、高崎市街は戦火に遭わずに済んだのにと、思われてならない。

どうにか朝方の列車で、本隊に辿り着いたら、天皇の放送があつた後だったので、テンヤワンヤの大騒ぎだった。それから除隊するまでの二週間は、あまりよく憶えていない、通信機は破壊し、残骸は深い井戸に放り込んだ。

八月二十九日生家に着くまでの食料として、米少々と階級章を外した軍服や下着、背囊、毛布等、使っていた物と、私が欲しがっていた、受信機用コンバーター（約二キロ）を背負ったり抱えたりして、二日ばかりで、九月一日に混雑の列車に揉まれ、生家に辿り着いた。

終戦時の壬生（ミブ）は宇都宮より東京寄り約二十キロにあり、軍部の飛行場があつた。その近く廃校になつた小学校校舎を本部にして、教育を受けていた。

航空通信士の一人前になるには一年以上訓練を受けなければ役に立たない。入隊してから終戦まで約九ヶ月しか経っていない、多くの兵隊は、三ヶ月で戦地に行く。私は戦場に行かず、通信術の訓練中で、教わり得であつた。